

金目川の堤防 ① (江戸時代の絵図より)

(2022. 10. 3)

昨年 2021. 7. 3 平塚市 7時4分「警戒レベル5・緊急安全確保」が、発令されました。台風8号に起因するものですが、この時、金目川の左岸、長瀬バス停付近の土手が浸食されるという被害を受けました。

金目川の堤防上は、平塚・秦野線の県道としてバスや車両の行き交う、交通量が多く、地元では利便性の高い道路として活用しています。

江戸時代に描かれた絵図からは、金目川、鈴川、玉川(渋田川)の3河川は、今日のように、流れの両側に堤防は築かれていませんでした。岸边に設けられた堤防は、部分のみで、その多くは、自然の流れに委ねられていたのです。

「川の流れが土地の高低差に基づく地形に沿った自然の流れである場合、また、その自然な流れを人為的に築く堤防などで固定・制御できない場合、常に川の流れは高度面より低い位置を流れ、且つ蛇行・分流して氾濫を繰り返すことになる」(我が住む里の江戸時代p157)との指摘がなされます。金田地区を流れる金目川は、同様な地理的条件のもとにありました。

- 「1684（貞享元年）金目川通堤川除普請裁許絵図の部分」 図



- 前のページは、金目川の筋替えが行われる前の絵図です。
現在の流れは、1706（宝永3）年、川が流れていなかった扇状地上を、人工的に川を掘り、古い流れは埋め戻されました。
- 金目地区、大堤の堤防は強固に描かれ、決壊の多い個所であったことが分かります。
（秦野県道の鶴巻への分岐付近）
- 金目川の流れがくねくねと曲がって（曲流・蛇行）います。
扇状地の傾斜地斜面の上を流れる、人の手が加わらない、自然の流れです。
- 金目川が入野村の集落を二分するように流れています。長持は右岸に属しています。
入野と記された地域は、今の入野飯島と考えられます。
- 不鮮明ですが、金目川の左岸飯島と右岸に入野と記された集落の対岸の一部に堤防が描おかれているようです。
（堤防は、金目川の沿岸全体に設けらず、流れが強くあたり、洪水が発生する危険度の高い場所に築かれていました。）
- 自然の流れは平地を削り（浸食）、耕地面より低いところを流れていました。
当時の技術では、川から農業用水を利用するのは難しく、耕作することが困難な土地（開発されない）も多く存在しました。
- 現在、金目川は、筋替えにより全面的に堤防で守られ、川底は平地より高い天井川として掘り替えられました。農業用水の取水には利便性の高い河川となりました。

金目川堤防



- 大堤が強固に描かれています。
金目川の流れが大堤に差し掛かる直前、急なカーブが確認されます。地理的には「大磯丘陵」の「鷲坂」で流れがぶつかり、水量が増し急流となり、「大堤」に流れ当たります。
確認される金目川の旧河道は、堤がなく、北東方向へ流れた跡が分かります。いつの時代か、金目川の流れを堀替えこの地に堤を設けました（堀替えの時期は諸説あります）
筋替えの後、破堤し水害が頻発したため、強固な堤防が構築されました。
- 金目川から農業用水を取水するために、大堤には水門（坎樋・いりひ：土手を穿って用水を流す）が設けられ、一帯の水田を潤しました。
- 金目観音の下流、金目川の左岸、川に沿って堤（堤防）が築かれています。柳堤と呼ばれていたと思われます。金目川が増水した時、氾濫・洪水を防ぐ目的で構築されました。（この部分も川は曲流・蛇行しています）

金田村付近

片岡村の一部と金田地区に相当する範囲が描かれています。

金田地区内の堤（つつみ・堤防）は、飯島堤、下って左岸に堤と思われる描写が見られます。

近世期、金目川の築堤は、彫り込んだ土砂を左岸に盛り上げ、堤防とする方式がとられていました。

扇状地地形を流れる金目川の自然な流れは、地表の土地を浸食しながら流れ、図に記されるように、曲がりくねっていました。（蛇行）

飯島堤は、標高の高い位置にあり、金目川の決壊により、被害が金田地区内に及ぶのを防ぐ意味があったと思われます。（飯島村には控え土手も構築されていました）

下流域は、曲流し、堤防が築かれていません。洪水の被害に悩まされました。

1706（宝永3）年、金目川の筋替えが完成し、高い河床、直線化と両岸に堤防が構築されました。



飯島の控え土手

飯島村と西側に位置する片岡村（金目）との境に「控え土手」が構築されました。

金目川の堤防決壊による氾濫・洪水から集落や田畑を守るため、平地に「土手」が、築られました。

飯島の控え土手の構築の年代、高さ・巾など規模等の記録がないので、土手の詳細は分かりません。

■ 地図に表現された「控え土手」

① 1882（明治 15）年 陸軍参謀本部 フランス式彩色地図



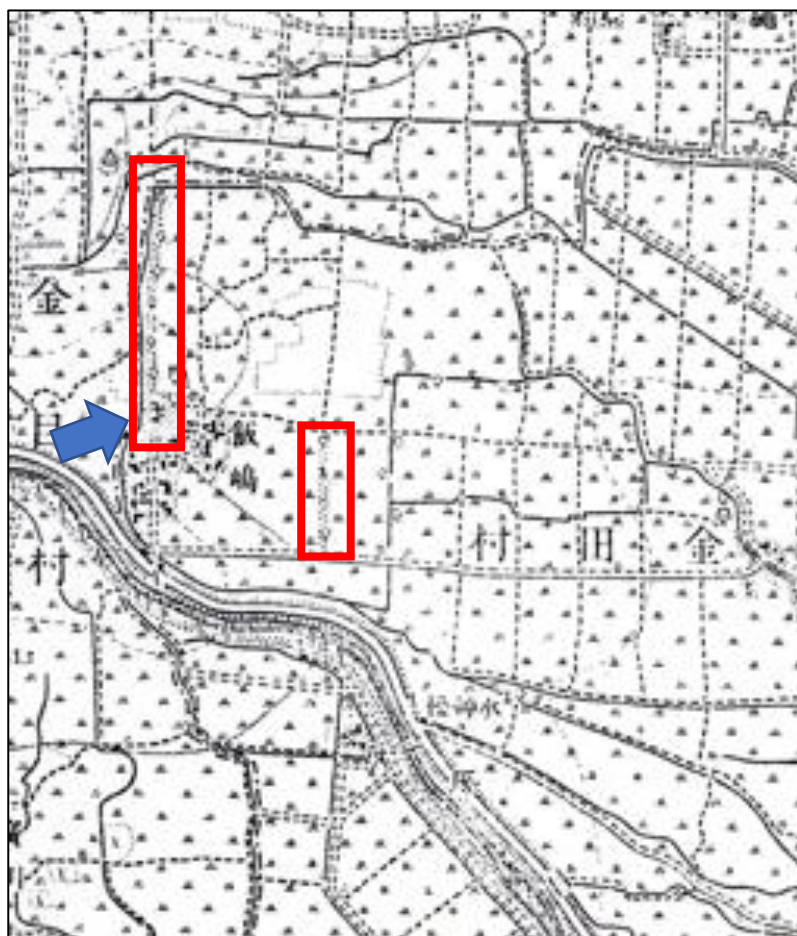
氾濫流の方向を表します。

「片岡村境の控え土手」は、金目川が蛇行し、破堤・氾濫からの洪水を食い止めるために、設けられました。

「ナガヤマ控え土手」は、飯島の控え土手からの越水による洪水を食い止めるために設けられたと考えられます

「ナガヤマ控え土手」は、飯島村と寺田縄村境に構築されていました。

② 1906（明治39）年 地形図




「ナガヤマ控え土手」は、金田地区の耕地整理の時に消滅したと伝えられています。

金目川の筋替え後、土手両岸の複数個所に、水門（坎樋）が設けられ、農業用水として広い水田地帯が形成されました。

地図からは、金田地区の大部分が水田となり、「米の単作地帯」であることが、はっきりと分かります。

③ 1974～78(昭和49～53)年「地盤サポートマップ」シャパンホームシールド社



 金目川で度々破堤し、氾濫・洪水となった個所と氾濫流の主な方向を示しています。

- 飯島の「控え土手」は、金目川が小田厚道路インターの南東部で曲っている付近の破堤に備えていることが、分かります。
現在は、「控え土手」の西側に住宅が密集していますが、古い地図からは、水田地帯であったことが確認されます。金目川の決壊が度々起こり、金田地区の集落や田畑をまもる為に、「控え土手」を構築しました、今後、万一堤防が決壊したならば、この地は洪水被害を受けることになります。
- 金旭中学校付近の金目川の曲流は、度々、破堤・氾濫・洪水を起こしました。金目川下流部の長持と纏の境には、高さ2.7mに及ぶ規模の大きな控え土手（現在は、纏緑道として、散策路となっています）が構築されました。
大規模な控え土手が必要になる程、ここでの破堤の規模も大きかったことが分かります。
- 3カ所目は「おおまがり」と呼ばれています。金田地区は東の鈴川方面の標高が低くなっています。ここでの破堤は、深刻な洪水被害をもたらすと思います。

④ 「飯島控え土手」の現況



飯島地域を東方面から撮影しました。刈り入れを待つ稲穂が実っています。

住宅の前に木々が林のように見えます。南北に一直線状木々が植わっています。ここが現存する飯島の「控え土手遺構」になります。

金目川が決壊した場合、この土手で氾濫の水の流れを遮り、金田地区の集落や水田を洪水から守ります。視界に入る家々は、控え土手の向こう側、片岡地域の家です。飯島の集落の多くは、写真の左側外、金目川の堤防に接する微高地（高いところは標高 14 m）に立地しています。



控え土手の西側、片岡地域（土手の向こう側）に連合用水と呼ぶ用水路があります。

金目川堰（飯島堰）から取水された用水が、寺田縄方面の水田に活用されます。

この用水路は、土手で遮られた氾濫流を流す意味もありました。



片岡地域側から見た控え土手です。金田地区は、土手の向こう側に当たります。
この地域は、埋め立てられ、畑地や住宅地となっています。土手の盛り土の様子は、分かりません。



土手を東側、金田地区方面からから撮影しました。構築当時の様子は記録がなく不明ですが、遺構の現況です。

明珠院の屋根が見えます。

小田厚の道路建設で、「控え土手」の北部分が削られ、現在はありません。(参照p8)